
ルイズ：ハルゲギニアに還る

ポギャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルイズ・ハルゲギニアに還る

【ISBN】

N4897Y

【作者名】

ポギヤン

【あらすじ】

ルイズが5歳の時、或魔法の事故で、異世界地球に渡り、色々な事が合つて、漸く15歳の春先に、ハルゲギニアに、帰還した時から、物語が動き出して行く……

ルイズの地球での10年その1（前書き）

皆様の「」指摘を、

受けまして

001話を編集し直して

投稿しました。

来れからも、不備等が、会つたら遠慮無く、
ご指摘を願います。

ルイズの地球での10年その1

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」
5歳の、ある春の日在った。

その日ルイズは、或、覚えたての呪文を唱え、召喚の鏡を呼び出すに、成功して、ハシャギ過ぎて躊躇、鏡に触れて?そのまま吸い込まれて、消えて云つた。

その光景を、目撃した、使用人がヴァリエール公爵夫妻に、至急報告して、連絡を受けた、公爵夫妻は、家臣並びに使用人を総動員して、城館周辺、及び、ヴァリエール領地内を隅々まで捜索したが、見付からず、更に探索の手をトリステインを始めハルゲギニア中に、拡げたが見付からず?

そのまま、10年の歳月が過ぎ去つた。

その頃、鏡の中に消えたルイズは、?

『此処は何処なのー母様、父様、ちい姉様、怖いよーお腹すいたよーうわあーん、うわあーん、あーん、あん、』

辺り憚らず大声で泣きわめく、ルイズ、すると。

「何を損なに泣いているのかい、可愛いい顔が、台なしですよ、小さなお嬢さん」

急に声を掛けられ、びくつくルイズ立つたが、良く見ると、優しい笑顔でこちらを見る、おじさんがいた。

来れが後にルイズを引き取り、養女にした、敷島礼次郎「博士」との、初めての出会いだった。

(ルイズの心の声)

(博士と出会いから、5年が過ぎ、私は今、10歳に成り、此、5年間の出来事を振り返っていた。)

(色々な事が、遭った話ね、あれから、博士の家、兼、研究所に入つて、色々な事を聴き、私も知つてゐる事、總て話した結果、此処は、ハルゲギニアで無く、地球と言う、異世界の日本国内の某都市と言う事だつた)

(私は、悟つた、一度と母様や父様、姉様達と、逢えないと、そして涙が止まらない程、大声で泣く私を、優しく抱きしめながら、博士は、

「君を必ず絶対にハルゲギニアに還して見せると」

誓つてくれた!)

(あれから、博士は、ツテを使い裏から、法務局に手を廻して私の戸籍を修得して、博士の養女に成つた)

(それから博士は、言葉は何故か、通じ合えるけど、日本語が読めない私に、平仮名、片仮名、漢字を教えてくれて、更に算数や地球世界の知識や、各種常識等を、統べて教えてくれるの、良い事何だけど、私は、少々着いて行けなくて、パニックに成つた)

(私が此処に来て一ヶ月が過ぎた頃、私と博士は、お互に隠していた秘密を伝え有つた、

『私、才能は無いけど、魔法が使えるの〜』

「僕もね、台した者じゃ無いけど、超能力者なんだ」

私と博士はそう言い合つて笑つたけど、後に博士の力を見せて貰つたけど、謙遜だった事が判つた、立つてサイコキネシスは、

風のスクウェアー立つし、パイロキネシス何か、火のスクウェアーを超える威力だし、テレポーティショーンは、コモンマジックや、四系統魔法でも出来ないし、伝説の虚無は出来たらしいけど、でも一番凄いのは、予知能力よね、あれで株式で儲けたり、各種ギャンブルで稼ぐのよね～）

（日本に来て1年ぐらいは、驚きの連続だつたは、馬より速くて乗り心地抜群の自動車や、火竜と同じぐらいのスピードで、一度に千人者の人を乗せて走る電車に、風竜より遙に速くて高く飛ぶ飛行機等、あと空は飛ばないけど、

ハルゲギニアのフネより遙に大きな海を走る船等、驚く事ばかりだつた）

（でも博士の此、話を聞いたときは、哀しかった、博士は生まれ時から強大な力を持ち、それゆえ、親兄弟に恐れられ淋しい子供時代を、過ごし、中学を卒業し、東京に出て来て、働きながら、高校、大学、大学院を卒業して、各種の資格や博士号を修得した博士は、凄い）

（私の戸籍上の誕生日は、3月3日なので、日本に来て一年がたつた頃、小学校に、入学する事に成る）

（最初は平民の学校何てと思ははしたけど、やう、地球世界は王様は居るけど、貴族は殆ど居ないのよね、）

（私が通う所は、研究所の近くの小学、中学、高校、

大学まで有る一貫教育の女子校のお嬢さま学校だった）

（此処は創立100年以上を誇る、伝統の名門お嬢さま学校だけに、

学業とスポーツの所謂、文武両道をモットーに、21世紀の日本では珍しい、淑女しての各種厳しい常識や嗜み及び道徳觀を、叩き込む、恐ろしい学校でした、逸れに比べたら、後にハルゲギニアに還つて入学したトリステイン魔法学院等は、生徒に甘く、規律が無いに等しい、馬鹿学校でしか、有りません）

（此処の地球世界の月は、ハルゲギニアの双月と違い一つで一回り小さくて色も黄色い月ですが、此処の人類はその月にロケットを飛ばして行つたのですから、物凄い事です）

（私が魔法の訓練をしたいのと、

言つと、

博士は、某県、奥秩父の、更に奥に或、博士所有の別荘を、使いなさいと、週末の休みに、一人で良くなよつに成つた）

（そこは、近くに小さな渓流が有り、閑静で緑豊かな、と
ても良い場所で、
気に入りでも有る）

（博士が私の魔法を使うのを見たり、私から聞き出した、ハルゲギニアの魔法の知識を知つて出した結論は、

失われたと謂われる、伝説の虚無だと。

私何かが虚無等で或はずが有りません、

相違つて博士を見ると、哀しい瞳をして
「ルイズ、人は誰でも無限の可能性を持つて要るんだよ！ここで諦めたら、そこから先は何も進めないだよ、」

（そう言いながら私を、そつと優しく包み込む様に抱きしめてくれ

る、博士)

(後に成つて思ひと、とても恥ずかしかった)

(あれから、博士のアドバイスも有り、爆発魔法の制御も出来る様に為り、等々フライや、レビティション等の各種コモンマジックが出来る様になつた、嬉しい)

(魔法が使える様に成つて、自信がつき、学校でも友達が出来たり、部活で柔道部に入り、とても充実した日々を送り、季節は巡り)

(10歳に成つた私は、博士の奨めも有り、紹介で或、道場に剣術を習いに通い出した、道場で一つ上で11歳に為る、生涯に渡る、運命のパートナーに成る?)

平賀才人に出会つた。

春の淡い陽射しの、午後の出来事立つた
続く。

ルイズの地球での10年その1（後書き）

只今、002話を執筆中です。

002話 ルイズの地球での10年後の2（前書き）

最初の001話を
皆様方のご指摘を請けて、

編集し直し、再投稿しましたが

まだ、システムに慣れて無くて、

皆様方に頂いた

感想文を消して仕舞い

誠に申し訳ございません

来れからは、気をつけて行きますので

宜しくお願いします。

002話 ルイズの地球での10年その2

東京都内某剣道場内

「あああ…なんだ此処は？ボロボロな処だあ…真ともに、剣道を教えてくれんのか～」

『あんたね～此処は・剣術場よ！剣術場！』

「そんなの、どっちも一緒だろ～

「

『一緒に分け無いでしょ～…あんた、何にも知らないで来たの～脳天気ね～呆れるは…

』

「べべ、別に、良いだろ～逸れより、俺は、あんたじやあねえ、平賀才人と言つ、立派な名前があんだけ～

』

『逸れは、悪かつたわ？私は、ルイズ・フラン…いえ、敷島ルイズよ～宜しくね』

相違つて握手を求める、ルイズ

「なあルイズつて呼んでいいか

』

『良いわよー馬鹿正直そつだし、特別に呼ば・せ・て・あ・げ・る
!』

「なんだあ～偉そうな、上から田線は～」

『来れでも! あんたの事、一応褒めてるのよー』

「だから、あんたじやあねえよー才人って云つてんだらうがー此、
ピンク頭が!」

『何ですつて!…』

(ルイズの心の声)

(そう、最悪の出会い立つたのよ あの時、コテンパンに熨て挙
げたもんだからー本当は次から来る気は、無かつたのよねーサイト
は、)

(あの日から土日の週末は、

剣術の早瀬平八郎師匠?

処に通うのが嬉しくって、ウキウキしては、サイトに逢えるからー

(そりゃあ、サイトは、

馬鹿でスケベだし、あと、オツチヨコチヨイで、すぐ気が抜ける奴
だけど、頑固な程真っ直ぐな熱血漢の正直者だし、そつゆつ処があ
いつの長所なのかなー)

（剣術練習が終るとお腹が空いてるから、サイトが好きなマックの照り焼きバーガを一人して食べに行つり、その次は私の好物の吉牛の牛丼大盛を食べたり、珠にはカラオケやボーリング、映画等を楽しんだり？してたわね～）

（そう有れば小学校の修学旅行先が沖縄で、初めてジエット旅客機に乗ったときは、感動しわね～そんな日本での楽しい日々が、終りに近付いて居たなんて気付きしなかつたのよね～あの頃の私は！）

（博士にとても深刻な事を、打ち明けられたのは、中学の修学旅行先のオーストラリアから、帰つて来た翌朝の事でした）

早朝、ルイズが起きて、リビングに行くと。

『おはよう、博士』
「おはようルイズ、とても大事な話が或から、ソファーに座つて、黙つて聞いてくれないか。」

ルイズは静かに博士の話を聞いていた、

「ルイズ、結論から先に言うと、此まま君が地球世界に居続けると、此、地球とルイズのハルゲギニア世界が異次元空間の歪みに依つて、あと、

5年以内に内部崩壊を起こして、消滅擦ることがわかつた！」

『そ、それは、どう言つた事ですかー博士！』

博士がルイズに、語つて聞かせた事は、ルイズ自身の膨大な魔力がハルゲギニア世界を構成する力の源の一部分で有り、ルイズが長期間不在の為、バランスが崩れラインが繋がつて要るルイズを通して、此、地球世界の力の源に過剰なエネルギーが送り込まれて

地球世界全体が、活性化して内部崩壊を起こすと言つ事だった、

一方のハルゲギニアもエネルギーの流失でバランスを崩して同じく内部崩壊を起こしてしまった事だった。

「だからルイズを一年以内にハルゲギニアに送り返そと、思つて
いる」

「又、其が君に誓つた、約束事立つたがルイズ自身は、今、どう思つてゐるんだい」

『……わ、私は、今、そんな、重大な事、きゅ、急に謂われても？』

「重大事を急に謂われてルイズにも、戸惑

うが事が色々有るのは、判つてはいるが決心して欲しい　其に魔

力制御が真だ、不安定だから、努力して完全に安定差して欲しい、

時間が掛かると思うから、その間に結論を出せば良いぞ、慌てて決める事は無いよルイズ』

そうルイズに優しく語る礼次郎だつた。

(ルイズの心の声)

(博士に重大事を聞かさた私は、暫く茫然としていたけど、はつとして気付き、来れからの事を色々考えていた)

(今まで夢に見る殆ど逢いたかつた、愛しい家族の元へ還れると、判つたのに、

本当は嬉しい筈なのに、胸の奥がズキ、ズキ、して痛かつたのはサ
イトの明るい笑顔が心に想い浮かんで？居たからなの……)

博士がルイズに重大事を告げた日から一月が過ぎた日の

「或街の喫茶店内」

「どうしたんだルイズ、映画館に入る前からボーとしてたし、今も心此處に非ずだし…」

『別に……』

「別について、今日だけじゃねえ、最近のお前…どつかおかしいんじや無いのか…」

『べ、別に、おかしく無いわよ…ふ、普通よ、極普通』

「いや…でつたいに、違う…良く、溜め息抜かしつくして、飯を食に行つても、残すし、今までのルイズじゃ…考えられねえんだよ」

『何よ、それ、私だつて…溜め息ぐらごくくして、調子が悪ければ、御飯立つて残すわよ、』

「なあ……ルイズ」

『何よ

「何か悩み事が或なら、相談してくれ無いか、俺じゃあ、頼り無いかも痴れないが、俺ルイズの事が凄く、心配何だよ、ふつと何処かに消えて仕舞いそうで」

そう才人に謂われてギクっとしたルイズ立った。

『そそそ存な事有る分け無いわよ!』

「そうか、其なら良いんだ、でも、もしも、悩み事が出来たら、俺に相談してくれたら、俺、凄く嬉しいんだ、」

『……判つたわ、もしも悩み事が出来たら、一番先にサイトに相談擦るわ、来れでいい』

「有り難う、絶対に相談してくれ!」

そつ言つて安心擦る才人で在つた。

研究所への帰り道のルイズ

（サイトが凄く私の事を心配してくれてた何て…とつても嬉しい…
…）

（だからこそ、絶対に！サイトには、こんな重たい秘密を知られる
訳には、知れば、心が真っ直ぐな人だから、悩んで、悩んで、苦し
むは）

（…其に後先考えない処が或から、二人いしょつに行こう何て言い
出しかね無い人だから…）

才人には、眞実を告げずにハルゲギニアに還ろうと、思っていたル
イズで有つた。

それから、日にちは立ち、ルイズと博士はハルゲギニアへの帰還準備に向けて、各種装置の製作や魔力制御の向上に勤しむ日々を過ごしていた。

（明日は地球世界での、私の誕生日を迎えるのね、ふふ…博士に重大事を、告げられて一年近く達の…ね、

あれから色々な事が有ったは、

サイトの受験勉強の面倒を見たり、

海へ泳ぎに行つた時何て、初めて見る私の水着姿に顔を少し朱くして照れたときは、可愛いかったわ～）

才人との想い出を作る為に方々に出掛けた日々を思い出して、ルイズだった。

（……サイトとの楽しい日々も後一歩で終るのね……）

ハルゲギニアへの帰還の儀式は、三日後の早朝に奥秩父の博士の別荘で、行う事に成っていた。

(博士には、此、10年、何処の誰ともしれない見ず知らずの私を育ててくれて、学校に通わせてくれたり、各種知識や常識、道徳観等の人としての生き方を教えてくれたし、其だけで無く私をハルゲギニアに還してくれる、本当に博士には、感謝仕切れ無い程の恩を請けたのに、其を返す事が出来ない何てトリステインの貴族としては、

忸怩たる思いだわ)

(その事を博士に言つと

「僕が好きでした事だから、ライズは気に擦る事は無く、堂々と胸を張つてハルゲギニアに還ると良いよ、」

そう言つてくれた博士に私は抱き着いて涙を流しながら静に泣いていた、何時までも……)

続
く。

002話 ルイズの地球での10年その2（後書き）

次で地球編を終わらせたいと、

思いますが

どう成るのかは

作者もまだ判りません？

003話 ルイズの地球での10年その3（前書き）

漸く書き上げました。

003話 ルイズの地球での10年その3

ルイズの地球世界での誕生日を明日に控えた日のある街の
ファミレスの店内

「なあ、ルイズもう喰わねえのか？」

『チョット食欲が無くて』

「残すのならそのパン喰つても良いか？」

『もう、サイトたつら行儀悪いわよ！でも、ま、食べても良いわよ

「へへへ……悪いな～ルイズ、サンキュー」

『それにして
良く食べるわね~

感心するわー。』

「やうやあ師匠」

あんだけやられちやあな~腹がすくつてもんだー。」

『私達だって
決して弱くはないけど』

「そりゃあな、俺達のレベルは高校のトップレベルとかわらねえからな、」

『そりよね先生が強すぎるのよー。』

「有れば化け物だ、一瞬にして

詰め手来る足捌き、剣速の凄さ何て人間技じゃ無いからな~」

『そう知つてゐるサイト、先生つて若い頃武者修行と称して世界中を放浪して暴れまくり、各地で伝説を遺したらしいのよー。』

「とんでもねえ～オッサンだな～」

『全くそうよね～歩く人間火薬庫だわ有れば』

そう言って笑いこけるルイズと才人。

(ルイズ心の声)

(その早瀬平八郎先生は博士の親友で、

私の事を博士以外で知つてゐる唯一の人で有り、

剣術の師匠でも有る

先生に5年間の稽古の御礼を申し上げてハルゲギニアに還る事を告げた)

(そう言つと先生は「還るのか、向こうに行つても剣術の修行は怠るなよ!」

あの馬鹿には告げずに行くのか「

そう言つた先生の顔は少し淋しそうだった…)

「おおい、ルイズ聞いているのか~」

『……え、何か言つた、サイト』

「何だよ~俺の話を聞いてなかつたのか!」

『じめんね、考え方をしていたから』

「何だよ~せつかく明日はルイズの誕生日と俺達の高校入学を祝つて、

何処かに遊びに行きたいのか聞いてたのに。』

『悪かったわそのお詫びに、どうせ遊びに行くな、おおおお奥秩父に在る

博士のの、別荘に来ない、土日のととと泊まりがけで、もとも勿論二人切りよー』

「ルル…ルイズさんそれって…まさか、あ、あれをコウシテ、ナ、ナニヲ、くんずホグレツ、OKの、有れの事ですか？」

『もう、声が大きいわよ、周囲に聞こえてしまつわよ。』

「ほ、本気なんだな！今更 ダメでしたなんて事は、無しだからなあー

『……ううう煩いのよ!だから、大声で喋るなーと言つてんでしょうが!』

『このーおお馬鹿、工口犬が!』

そう叫びながら

全身を不死鳥さながらの紅蓮の炎のオーラを纏いし
ルイズが、

今だテンションを
上げて喜んでいる
才人に襲い掛かり、

まずはドロップキックを鮮やかに決め、
才人を床にはいつくばらせ、

そこを素早く四のじ固めに持ち込み更には、コブラツイストやキン
肉バスター、キン肉ドライバー等、数々の技を繰り出し才人を阿鼻
叫喚の地獄へと叩き込む
ルイズさんで有つた。

(女を怒らせると怖い)

（翌日のある街の駅前の広場）

「おおいコッチ、コッチ、「

『何よ、サイト朝早くから情けない声出して
もつとシャツキとしなさいよーシャツキと』

『何言つてやがる、これは昨日お前が俺を地獄のフルボッコにした
後遺症じやあないかー』

『な、何よ、あれはサイトが悪いんだから…』

(店をメチャクチャにした私達は
あれから店の人達に物凄く叱られ

弁償する嵌になり

博士に事情を話してお金を払って貰い

その事で御免なさいと謝ると。

「別に気にする事はないんだよルイズ、次から気をつけてくれれば

良い事だから」と、

笑つてそう言つてくれる博士だけど

私は申し訳なさでいつぱいなのに、
コイツときたら朝から能天氣な顔して
少しも反省していないわね！）

（昨日はやり過ぎたと思っていたのに

こんな事ならもつと徹底的にすればよかつたわ！）

そう思うルイズは不機嫌になり、
奥秩父に向かう電車の車内で
ギヤアギヤア、

周囲の迷惑も考えず煩い一人だった。

まだ不機嫌だつたルイズは、

才人を連れて奥秩父の名勝地を散策して

昼には秩父の名物料理を食べた頃には

機嫌も直していたルイズさんでした。？

食後のデザートを食べて店を出た一人は、目的地の敷島博士の別荘
を目指して歩く。

春先のまだ少し寒い中、
木漏れ日の陽射しを浴びて歩く
小道近くに流れる小川のセセラギを聞きながらしていると、

小さな坂道を登る先に、
周りを緑豊かな景色に囲まれた
普通より少し大きくて瀟洒な、
それが敷島博士の別荘で在った。

「へえ～此処が敷島博士の別荘なのか」

『さうよ、ステキな処でしょう』

そういうて 前よりも少しだけ成長した、まだまだペタンコの胸を
張つて誇らしそうにしていた

ルイズさん。

(ムムム……何か非常に失礼な事を言われた気がするわねー)

ルイズが才人を伴つて暖炉の在
広いリビングのふかふかのソファーに一人仲良く座ると才人が。

「スゲーなあ、敷島博士の別荘は歩く度に沈むジュウタンなんて
俺、初めてだよ！
此ソファーだつてふかふかだしな～」

『そうよ！別荘の建物自体は博士が設計図を引き、
それを国内の一流メーカーが建てたのよ』

実は博士は建築士

の免許を所持していて、

それで設計図を引けたのであった。

『内装はヨーロッパの有名インテリアデザイナーに頼んだし、
暖炉を筆頭に家具や寝具、キッチン、照明等も北欧の
一流メーカーから
輸入したんだから～良いでしょ。』

そう言つてまたもやペタンコの胸を張つて、

別荘の事なのか博士の事なのか
分かりにくいか

物凄く自慢していたルイズさんであった。

(……また、物凄く失礼な事を言われた気がするわー。)

それからルイズは
才人を連れて
別荘内を
案内して廻ると
リビングで一人でお茶を飲み
午後のひと時を楽しんでいた。

(……もう何をしているのよ！私たつら此処まできながらーあと一
歩の決断がつかないなんて…)

此処まできながら
まだ、決心できないルイズ…

(もうーサイトたつら、
何時もはしつこいくらいに

キスしようとしたり身体を抱きしめて」よつとして来るくせにー
さつきから顔を赤らめてモジモジしてー意氣地が無いのよー男のく
せにー)

才人のへタレぶりに、

ルイズの心の中は強風が吹き荒れようとしていたが、

(……此ままじゃあ何時までたつても埒があかないわね、
ショウガナイか)

(サイトはへタレだし

私の方から

アプローチするしかないわねー…)

『ねえ～サ、サイト～おおおおお風呂ににこい、
ははは入らない二人切りでー!』

頬を朱く染め恥ずかしそうにしながら
才人にそう言つた
ルイズさん!

その言葉を聞いた
才人は

「ほほほ本気ですか ルルルイズさん？」

顔を真っ赤にして
ルイズに聞き返す
根性無しのヘタレの才人だった。

『こここんな恥ずかしい事

おおお女の子の方から言わせないでよ、
いいい一緒に入るのが嫌なら
別、別に良いのよ
わわわ私としてわね？』

「いえいえ有り難く一人一緒に入らせて頂きます
ルイズ様」

「ウシテ一人は風呂場に向かうのであつた……やれやれ。

続く
...

003話 ルイズの地球での10年その3（後書き）

恋愛部分を書き上げるのは。
難しい。

004話ルイズの地球での10年その4（前書き）

こんな駄文でも、
楽しみにしていた方達に、004話を楽しんでください。
(今回で地球編は終ります。次回からハルゲギニア編です。)

004話 ルイズの地球での10年その4

「心臓をドキドキさせながら、風呂場への廊下を静かに歩いて行くルイズとオレ～」

「ル、ルイズさん、ささ先にはいっておく、おくんなまし～させ…」

「…」

『もう、サイトたつら変な話しかたして！緊張してるのかしら～？』

「いや別に、キキキンチョウなんかしてね～よ？」

そう強がりを言いながらも。肩は震え
脚もガクガクブルブルなヘタレで、
情けないオ人で
あつた。

結局はルイズが渋るオ人を強引に引きずつて、脱衣所に入つて行つた。

「あの～ルイズさんマジマジと見られると。恥ずかしいん
ですか～」

『…別に良いでしょ』コレカラ一人一緒にに入るんだから、ね』

「そうおっしゃいますがルイズさん。まだ服を脱いでいないんです
が。」

『ああああんたが脱いだら、私もすぐに脱ぐわよ！だから最後
に残った

そのパンツ！さあと脱ぎなさいよー』

そういうて、眼を

血走らせて才人の

履いているパンツを脱がせる。ルイズ

これだから女は怖い怖い。

才人を後ろ向きに

させて、服を脱いで生まれたままの姿に成るルイズ

「ルルルイズ、もう前を向いても良いか？」

『…ええ前を向いても良いわよ』

そう言われて才人が見たのは、流れるようにウェーブがかかったピン

クブロンドのしなやかな髪に、

鳶色の潤んだ瞳

朱く染めた頬に整った鼻筋に小さな薄紅色の可愛いい顔とまるでフランス人形のような顔。

更に両手で隠す形の良い小さな胸に可愛いいお臍。下に行くと髪と同じピenk色の若草にアサリのズジ、スラットした細くて長い脚と身体全体が華奢な物凄い美少女がそこにいた。

「あ、綺麗だあ……ルイズ」

『あああああまり見ないでよ～はは恥ずかしいんだから…』

『……そそそれよりも。サササイトの方こゝを隠さなくて良いの、ブブ布拉ブラした物が見えてこるのはだけど…』

「おおお前～み見てんじゃあねえよ…」

『別に良いじやあ無い。か、可愛こりしこの持つてゐるのだから』

「ハアフウ～」

ルイズに股間が可愛い良いと言われ。落ち込む才人。

氣を取り直してルイズと一緒に風呂場に入る才人。

「うわあ～俺ん家のフロと違つて広くて天井が高く明るくつて。それに凄くきれいだ～」

『ウフフ～説明口調有難う。2年前に改装して浴槽は大理石で大人6人が余裕で入れる程広いし。

それにオール電化だから24時間何時でもすぐに入れるのよ』

それからルイズと才人は。二人で身体を洗いあつて～ウフ、キヤアキヤアな事を繰り広げたのであつた。チクショウ…羨ましい。

たつぱり楽しんだ二人は。風呂場を出てリビングのソファーで寛ぐのだが、突然 才人が?。

「あのなあ、ルイズ」

『なあに、サイト改まつて何かあるの』

『ぐつと睡を飲み込み、覚悟を決めた才人は。

「今日はルイズの誕生日だから、俺お年玉や冬休みのバイトして貯めた金でルイズのバースデープレゼント買つたんだ」

そう言って才人は

綺麗な包みにピンクのリボンを施した品物をルイズに手渡した。

『これを私に買つてくれたの。』

「そりだルイズ、早く開けて見てくれ

早速、品物の中を開けて見ると金の鎖にプラチナの台座に嵌め込まれた。粒は小さいがキラキラ光り輝く綺麗なピンクダイヤがあつた。
『……凄く嬉しい……有り難うサイト。』

そういうて。才人の胸に飛び込み 少し嬉し泣きの瞳でサイトを見つめるルイズだった。

「こんなに喜んでくれる。ルイズを見れて俺もスゲー嬉しいんだ！」

そういうて抱きしめあつて。キスをする一人だった。

(サイトが私にこんなにも。ステキなピンクダイヤのペンダントを貰つてくれた。)

(踊り出しそうに成るくらい物凄く嬉しい。サイトから貰つた此ペンダント肌身離さず一生手放さないわ！)

ルイズに取つては

想定外の嬉しいサプライズでしたが
あとは…

「オオオオレ、ルルルイズの此が好きなんだ。いやマジで
真剣にお前の事が大好きなんだー！
今からルイズの大切のモノを貰つから
覚悟してくれ！」

『……いいわ、私も覚悟していたし、…私の初めてをサイトにあげても良いわよ！…』

「ルイズー」

そう言つて才人は
ルイズを抱き上げて。所謂・お姫様ダッコをして。寝室に向かう才
人であった。

寝室に入ると一先ずはルイズをベッドに座らせ。着ていた
服と下着を脱がせ
生まれたままの姿にすると。才人も同じ様に脱いで裸になりルイズ
を抱きしめながら、ベッドの上に押し倒す才人であった。

ディープなキス等。色々な下準備をしてさあコレカラ大事な事に及
ぼうと例の
アレを使おとしていた才人にルイズは。……？

『チョット待つてサイト…』

「怖じけづいたのかルイズ！此処までして、今更止まらないぞー俺
は！」

『違うの～今日は～超～安全日だから～大丈夫なの～私～肌が弱い
から～アレを使わないで欲しいの～お・ね・が・い・ね。』

普段と全く違う程の可憐な仕種と声に
才人は…？

「本当に良いのか、生でしても」

『うん、良いの～』

そう言って頷く
ルイズ。

(じめんね。騙して本当は超危険日なの、明後日に。ハルゲギニア
に還つたら
サイトには一度と逢えないと思う。それだからこそ私はサイトとの
確かに、愛の絆がどうしても
欲しかった。

(そうしなければ

コレカラ一生、愛しいサイトに逢えなくなると思つと、
気が狂う程辛くて生きて行けそうにないから……)

ルイズの思惑も知らない。憐れなサイトはルイズと朝方までとても
深く激しく愛おしむ様に愛しあつていつた。……

仲良く抱きしめあう様に眠つていた一人が起きたのは、もう夕方頃
であった。

熱いシャワーを浴びた二人は

ルイズが簡単な夕食を用意して一人楽しく食べた後……

「俺は今から家に帰るけど、ルイズはどうする?」

『私は。あした此処で用事があるから
今日も泊まるわ。後で博士も来るから
心配しなくても大丈夫だからね。』

そう言つてルイズは才人を安心させて
送り出す様にする。

別荘の門の処まで
才人を見送りにきたルイズは…

『気をつけて帰つてね。それから途中寄り道して遅くなつて、御両親に心配かけてわ駄目だからねー』サイト

「バーコ。ルイズに言われなくとも
チャント判つてるよ俺も子供じゃあ無いんだからなー」

『うふふ……確かに、アソコは子供じゃあ無かつたわね』

「女の子がそんな言葉をいつちやあ駄目なんだよー」

『そんなんに怒らないでー』冗談よ。冗談

「冗談なら良いんだけどな?」

「一三日の中に連絡するからなー入学式までは、まだまだ遊べるからな。じゃあなルイズ」

(その頃には私は
ハルゲギニアに還つていて此世界には

居ないのよ、サイト……）

『サヨナラ、
サイト』

そつとてサイトの姿が見えなくなる迄見送った後。

別荘に入りリビングのソファーで静かに涙を流し、声を押し殺して
泣いていた
ルイズだった……

ルイズが泣き止み。暫くすると

いつの間にか敷島博士がリビングに着ていた。

『博士…… いつの間に』

涙を拭きながら博士に問い合わせた。ルイズだった。

『才人君との別れは済んだのかい。ルイズ…… 『…… そうです…… 終りました……』

未練が無いと言つたら、嘘に成るけども……覚悟を決めた積もりでし
たけど……けど……こんなに苦しい何て……私……』

今にも泣き出しそうな顔をしながら、博士に苦しい気持ちを伝えた
ルイズに。

博士は静に近寄り
そつと手を握り、
真つ直ぐに優しい瞳をして穏やかな声でルイズに……

「ルイズ、泣きたいときは我慢する事は無く泣きたければ。泣けば
良いんだよ
そして明日は良い笑顔でハルゲギニアに還つて欲しいと思つている
んだ ルイズには！」

『……博士……』

そつとつて博士の胸を借りて、泣きつづけるルイズでした。

（早朝の奥秩父）

三月上旬の春先とはいまだかなり寒かつたが、今日は雲ひとつ無
い快晴の青空が広がっていた此處

敷島博士の別荘ではある特別な儀式を行つ為の準備をしていた最中
で在つた。

『博士！此、支柱は此 場所に設置して良いですか。』

「いや、ルイズその支柱はあと北へ2センチ程動かしてくれないか。」

『

『判りました。あと2センチ北ですね～博士』

こうしてルイズと

敷島博士は別荘の裏庭一帯を使って

ハルゲギニアに帰還する為の簡易型の魔法の結界を築く為に必要な各種装置

『所謂増幅装置』

を。ルイズと博士は設置していくのである。

『これで統べて準備は整いましたね！後は、ルイズ、ハルゲギニアに持つて行く荷物は全部リヤカーに積み込みましたか？』

『はい！博士、荷物は全部頑丈に梱包してリヤカーに積み込みましたから～』

そう言って博士に

返事していた。

ルイズの荷物のリストはと言つと……

各種。技術書 医学書 薬学書 各学術書等の書籍や。

ルイズが地球上に来た時の服と靴そして大事な杖。小型の太陽光パネル6枚に小型充電器一台 各種医薬品セットのケース一つ 各種調味料多数 魚。肉。

フルーツ等の缶詰セット多数 インスタントカレー50個 インスタントの牛丼50個 チ○ンラーメン2ケース 真空パックのご飯100個 各種お菓子（大好きなチョコレート等）缶ジューースのケース2個 缶ビールのケース2個 日本酒2?が5パック 各種焼酎5本 高級ブランデー5本 高級ウイスキー5本 高級フランス産ワイン5本 おまけにウォッカ2本テキーラ2本 煙草200粒一トン 使い捨てライター200個 小型マッチ箱2万個 各種スキンケアセット多数 高級化粧品セット10個 その他日用品多数カセットコンロ2台。

カセットボンベ多数 塩と砂糖と胡椒が多数 ルイズの服と下着と靴が多数 各種筆記用具多数 高級万年筆10本 更にお気に入りの漫画本や恋愛物文庫小説等？小型折りたたみ自転車一台 ノートパソコン一台 デジタルビデオカメラ一台 一眼レフデジタルカメラ一台 コンパクトデジタルカメラ一台 ポータブルブルーレイプレイヤー一台 ポータブルDVDプレイヤー一台 映画。アニメ。ドラマ等のブルーレイやDVDソフト多数（極秘ソフト有り） 特注高級機械式腕時計1個 ソーラ腕時計10個（特殊な品物・ワルサーPPK一丁。九ミリ32ACP弾1400発 日本刀一本・

備前長船雪風）等の品物が多数……ルイズさん。どんだけ欲張りなんですか～。

『今、私の悪口を言われた気がするわね～』

アブナイ・アブナイ……

統べての準備が完了して後はハルゲギニアへの帰還の儀式を残すだけだった。

ルイズと博士は、最後に別れの挨拶をしていた。

『博士…十年もの長い間育てて頂き、更に此地球世界で生きて行く為の知識や常識等も教えてくださり、数々の思い出も下さり幸せでした。最後に博士の娘 敷島ルイズとして、本当に有り難うござります……。』

「ルイズ…親が娘を育てるのは当然の事なんだよ、僕の方こそ此十年君が側にいてくれてどんなに幸せだったか、だから僕こそ言いたい有り難うルイズ……」

『はか…いえ、お父さん……』

そう言って涙ぐみ。博士の胸に抱き着くルイズであった。

最後の別れも済まして。帰還の儀式を始めるルイズと博士。

『これから帰還の儀式を始めるから、用意して下さいルイズー。』

『はい！判りました博士。』

敷島博士に言われて用意していた。リヤカーを繋いだ特注のマウンテンバイクに跨がり杖として契約した。金の装飾を施した頑丈な造りの万年筆を取出していた。

「良いですか、ルイズ僕がカウント・スリーから始めるから、カウントゼロで増幅装置のスイッチを入れる時にルイズの持っている魔力を最大で上空に向けて放つて欲しいー」

『はい！博士何時でも始めてくださいー。』

「…では。始めます…スリー・ツー・ワン・ゼロ・開始…」敷島博士のカウントゼロの声でルイズは、全精神力を込めて魔法を上空に向けて放つ。

增幅装置のスイッチを入れた敷島博士も、ルイズと同じタイミングで上空に向けて超能力の力を放つていた。

結界の内に在・増幅装置によりルイズの魔法の力と敷島博士の超能力の力が増幅されて合わさった時。奇跡が起こりルイズの目前に光り輝く鏡の様なゲートが現れた・ゲートの向こうは。99.9%の確率?でハルゲギニア世界のヴァリエール公爵家に繋がっていた…筈である。

「ゲートが何時閉じるかシレマセンからすぐにゲートを潜りなさい。

」

「元気で暮らしてくださいルイズ…」

そう言つた敷島博士は。サヨナラは言わず ただ優しい瞳でルイズを見つめるだけだった。

『有り難う博士…さよなら…サイトオオオオオ…』

最後に才人の名前を叫んでリヤカーを繋いだマウンテンバイクに乗つていたルイズは。光り輝く鏡に吸い込まれる様に消えて行つたルイズ…

続く。

004話 ルイズの地球での10年その4（後書き）

漸く地球編が、終りました。

次からは、ハルゲギニア編を書き上げていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4897y/>

ルイズ：ハルゲギニアに還る

2011年11月20日03時31分発行